



NPO 法人 京都観光文化を考える会

都草だより

第90号
 発行人：小松香織
 編集人：相場まり子
 発行所：京都市上京区
 下立売通新町西入
 京都府庁旧本館2階
 電話：075-451-8146

■ 新入会員オリエンテーションに参加して



都草の案内板が見つからず、旧知事室見学受付の扉を見つけ 10 時からと書いてあったが扉を開けると、都草事務局が現れびっくり。都草入会費と京都検定 1 級模擬試験受験料の現金支払いのため 7 時半自転車で宇治の自宅を出発し、9 時に府庁旧本館に到着。用を済ませ退出しようとするも、お茶までご馳走になり、ついでに知事室家具の村井吉兵衛の寄贈名札を見学して帰ろうとした時、10 時からオリエンテーションがあると、急遽参加させていただく事に。京都検定 1 級を 6 度不合格の私は、神社仏閣の拝観料を払うのも厳しく、中に入らず済ます事もありましたが、商工会議所の 1 級講習会だけは受講しており都草の名前は知っておりました。

入会に至った直接のきっかけは、8 月 23 日土曜日、六地藏めぐりをしていた折、桂地藏で会社の先輩に偶然出会い、その場で豊田理事を紹介頂き、不思議と「これは良縁」と悟り、模擬試験に興味があった事もあり入会を決断しました。

オリエンテーションでは終始熊谷副理事長の軽妙なトークが炸裂。小松理事長、伊藤副理事長の話も交え、和やかな雰囲気で行進、祇園祭後祭大船鉾の手伝いや美化活動の要請もありました。

このご縁を活かし、京都検定 1 級に合格、将来、【One Coin Guide】という会社を興し京都観光文化を世界に発信していきたいと夢見ております。(会員 吉岡 靖史)

■ 嵐電・北野線と萬福寺の動画を YouTube で公開



映像制作プロジェクトでは、8 月に第 11 回「嵐電・北野線、夢と笑顔を運び続けて 1 世紀」、9 月に第 12 回「萬福寺～京都にある異境の寺」の動画を YouTube で公開しました。

桜のトンネルで親しまれている嵐電・北野線は、今年営業開始から 100 年を迎えました。本線の帷子ノ辻から北野白梅町まで全長 3.8Km の支線ですが、沿線には世界遺産に登録されている龍安寺、仁和寺をはじめとして、多くの有名な社寺があります。また、今は東映京都撮影所の 1 か所だけになってしまいましたが、かつては沿線に映画の撮影所が多く作られました。そんな北野線の歴史を振り返るとともに、駅名になっている社寺を紹介しています。現在嵐電では、立命館大学と連携し、絶滅危惧の恐れのあるフジバカマの保護、育成に力を入れています。そんな様子も紹介しています。



宇治にある黄檗宗大本山萬福寺は、建築様式、しつらえ、仏像、行事や僧侶の日常生活に至るまで、中国の明朝風を色濃く残す異色の寺院です。昨年、天王殿、本堂の大雄寶殿（だいおうほうでん）、法堂が国宝に指定されました。萬福寺は、江戸時代初期に渡来した、中国・明の高僧隱元禪師によって開かれました。隱元禪師は、明朝の禅宗文化を日本にもたらすとともに、煎茶道や普茶料理など、食文化や芸術面で現代に残る多くのものを伝えました。萬福寺でひととき目につく仏像が、天王殿の布袋像と、大雄寶殿の十八羅漢の中の羅睺羅尊者（らごらそんじゃ）です。2 体とも、一度見たら目に焼き付いてしまう姿をしています。上空からのドローン映像とともに、ぜひご覧ください。(会員 須田 信夫)

■ 羅城門復元模型の看板寄贈について



10 月中頃に JR 京都駅北口広場にある羅城門復元模型の柵に「平安京 羅城門復元模型 1/10」と書かれた看板が設置されます。看板は都草が「明日の京都文化遺産プラットフォーム」に寄贈するもので、5 月 25 日の「都草第 19 回通常総会」でその趣旨と予算が認められ、まもなくお披露目します。

この羅城門復元模型は、平成 6 (1994) 年に開催された“甦る平安京：平安建都 1200 年記念展”の期間中、京都市美術館 1 階中央北エリアに展示されていたものです。

その後、模型は旧メルパルク京都（北口広場の東側の建物）の地下室に長く保存されていましたが、平成 28 (2016) 年 11 月に「明日の京都文化遺産プラットフォーム」によって現在地に移設されました。今では“待ち合わせ場所”、“京都タワーを背景とした“撮影スポット”としても知られるようになりました。

JR 京都駅の一日の乗降者数は約 30 万人ですが、羅城門復元模型の建つあたりは北口広場の東端で比較的人の流れが少ない場所でした。しかし近年、京都駅東側に京都市立芸術大学やホテルなどが建ち、人々の行き来が増加しています。

ただ残念ながら門には扁額もなくこの模型を、黒澤明監督の映画「羅生門」や「今昔物語」などに登場する「羅城門」と分かる人は非常に少ないのです。

そこで都草では、この平安京のシンボルともいうべき建物を、修学旅行生や、観光客（特に外国人）が一目見て「羅城門」と分かるように、看板の寄贈をすることにしました。（特別顧問 坂本 孝志）

■ 第 42 回文化交流部会「洛北・岩倉の歴史あれこれ」



7 月 2 日（水）、岩倉の古民家カフェ「いささんち」の座敷を借りて、大阪公立大名誉教授中村治先生にご講演いただきました。空も曇って蒸し暑い中参加者は 27 名でした。聞きなれている洛中の話と違い、岩倉に生まれ育ち長年地元を研究されている先生のお話は、さらに奥の鞍馬や大原の話なども交えた内容で大変興味のあるお話でした。

岩倉は「里子預かり」などで発展してきたという内容でした。なぜなら、岩倉という土地は元々米と麦と薪の産地でしたが、これらは重いにも関わらず安くて収入が少なかったそうです。そこで市中に持って行って売るよりも里子などの滞在者に消費してもらおうという方法をとったのです。いつから始めたのかはわかりませんが、1924（大正 13）年には岩倉の 98 人を筆頭に上高野・修学院・一乗寺等に 251 人いたことが寺の過去帳や契約書などから推定されます。我が子を里子に出した側はどん

な人たちかといえば、公家、宗教関係者、祇園に出入りしていた旦那衆のみならず、乳の出ない母親もいたそうです。預け賃は無料から当時のお金で 400 円・不明まで。預かった子たちは、5 歳くらいまでがほとんどだったそうです。それ以上になると、手元から離すのが難しくなるということでした。中には預け親の跡継ぎとして残る事例もあったようです。

講演のあとは中村先生も囲んでおいしくお店のお弁当をいただきました。楽しく、充実したひと時を過ごせました。

（理事 植山 政雄）

